

輸入粗飼料の情勢

全酪連
購買生産指導部
購買推進課

北米コンテナ船情勢

4月9日にロサンゼルス港から発表された報告によると、ロサンゼルス港及びロングビーチ港沖合におけるコンテナ本船の滞船は44隻となっています。年始の1月9日の109隻をピークに滞船数は減少しており、日本向けの本船スケジュールも改善傾向にあります。沖合での滞船数も減り、ピーク時は1カ月程度かかっていた日本までの航海日数は直近では25日前後となっています。

また混乱が続いていたアルファルファ、チモシーが多く出荷されているPNWのシアトル、タコマ、バンクーバー港も改善の兆しが見えています。バンクーバー港では引き続き混雑が解消できず滞船が続いているものの、一部のターミナルでは冬期の荒天によって低下していた荷役効率も回復し、減便していた日本向けの本船数も徐々に回復しています。産地輸出業者も1-2月は出荷に苦慮していましたが、3月に入り出荷数量は増えており、年末年始に直面した最悪期は脱した感があります。

一方で積替港である上海・釜山・高雄・台北等では混雑が続いています。船社によっては10日から3週間程度、積替港でコンテナが滞留しているため、地方港向けを中心に引き続き不安定な入船状況になっています。

今年は北米西岸港湾労組（ILWU）と船社・ターミナル会社の使用者団体（PMA）間で労働協約更新の年となります。7月1日の契約満了に先駆け、5月12日から交渉が開始される予定ですが、交渉が難航し長期化すると、前回2014-15年の労使交渉時に直面したような西海岸全域の港湾混雑につながる恐れがあるため、今後交渉経過には注視が必要です。

ビートパルプ

【米国】

21-22年産は生育期及び冬期の保管期の天候に恵まれたため、製糖工場では生産が続いています。産地では、21-22年産は国内外の旺盛な引き合いから、余剰はなく全て制約済みとなっています。

3月末にUSDA（米国農務省）から発表となった、22-23年産における米国産ビートの予想作付面積によると、一部の主産地で換金性が良い他作物への転作が見られたものの、全体としては、ほぼ前年並みとなる、前年比99%の1,143,400エーカーとなりました。主産地では播種作業が開始されましたが、従来ロシアからビートを輸入していた、ヨーロッパ諸国がロシア産の手配をできなくなったことから、米国産へ

の引き合いが強くなっており、播種完了前に既にヨーロッパ向けで22-23年産のビートの一部が成約されている状況です。

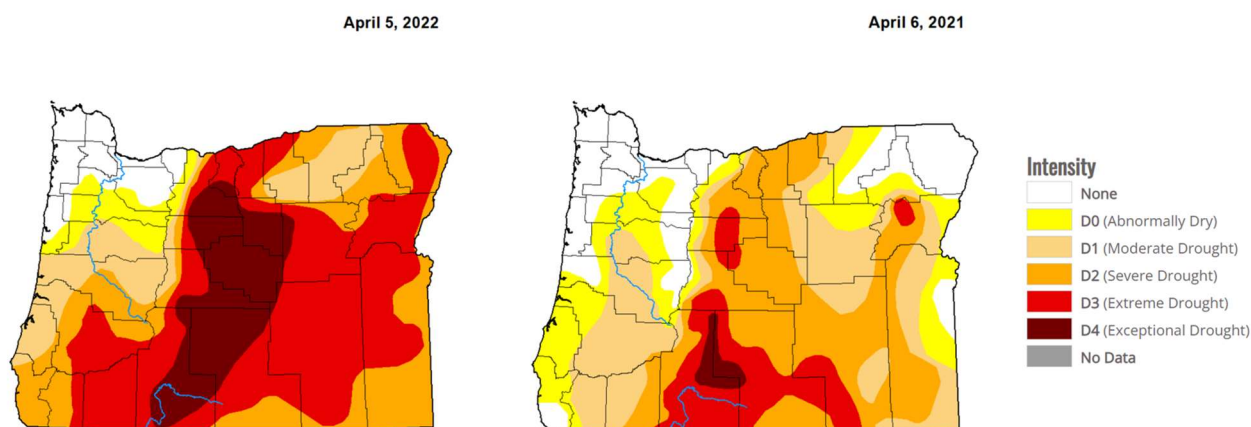
アルファルファ

ワシントン州

現在、21年産の産地在庫は成約済みとなっており余剰はない状況です。主産地であるワシントン州コロンビアベースンでは、5月から22年産1番刈の収穫が本格化する見込みです。22年産の作付面積は昨年来、相場が堅調なことから作付け意欲は比較的高く生産者によっては作付面積を増加させています。

オレゴン州

同州南部クラマス郡では2月の積雪量が昨年比およそ60%まで減少したことを受け、州知事より3月初旬に早魃の緊急事態宣言が発出されています。加えてクリスマスバレーが位置するレイク郡についても、既に厳しい早魃状況となっており、今後、農業用水使用の制限がかけられる可能性があり、22年産の生産への影響が懸念されています。



(オレゴン州における早魃状況比較 左：22年4月、右：21年4月、
出典：U.S. Drought Monitor)

カリフォルニア州

カリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、22年産1番刈の収穫が終盤を迎えており、一部の圃場では2番刈の収穫が開始されています。これまで天候に恵まれたことから、1番刈で分析値の高い高級品が多く発生しています。今後2番刈の収穫が本格化されますが、比較的冷涼な天候が続いており、2番刈も高級品中心の生産が期待されています。

一方産地では、好調な乳価を背景に米国内需と中国による旺盛な買付が行なわれており、高級品の相場は高騰しています。現在も毎週のようにトン当たり5ドルから10ドルの相場上昇が続いている状況で、今後も相場には注視が必要です。



インペリアルバレー産アルファルファ 1 番刈 (3/16 撮影)

米国産チモシー

産地輸出業者によると、22年産の作付面積は主産地であるワシントン州では概ね昨年並みも地域によっては若干減少しています。減少した地域は換金性の良いトウモロコシや小麦などに転作されている状況です。もうひとつの主産地であるアイダホ州は昨年並みの作付面積が予想されています。22年産1番刈の収穫は6月より順次開始されますが、非灌漑で栽培するアイダホでは生育期の降雨が望まれています。

スーダングラス

主産地であるカリフォルニア州南部インペリアルバレーでは、早播品の播種作業が開始されています。産地では、好調な相場を背景に競合作物である小麦が作付面積を拡大する半面、スーダンの作付面積は伸び悩んでおり、産地灌漑局から発表された4月1日付時点のスーダンの作付面積は13,987エーカー（前年13,773エーカー）とほぼ、前年並みとなっています。今後播種作業が本格化するため、引き続き作付面積には注目する必要があります。

産地相場は、肥料代、燃料費、人件費等の生産コストが上昇しているため、堅調に推移することが予想されています。一方で各輸出業者では21年産からの繰り越し在庫がないため、在庫を補填するために収穫開始とともに旺盛な買付が行なわれ相場が過熱する可能性があります。

クレーングラス（クレーンは全酪連の登録商標です）

産地灌漑当局の発表によると3月15日時点での22年産の作付面積は19,323エーカー（前年19,683トン）と昨年同期比98%の作付けとなっています。小麦をはじめアルファルファなど他の作物に比べ換金性に劣ることから、生産者におけるクレーングラスの作付け意欲は高くない状況です。生育状況については、圃場への散水作

業も随時行われ、順調に生育しており4月下旬から1番刈の収穫が開始される見込みです。

バミューダ

主産地であるインペリアル群灌漑局の発表によると、3月15日時点での22年産の作付面積は61,503エーカー（前年同期：62,119エーカー）と前年比99%とほぼ前年並みとなっています。例年春先は主に種子向けに収穫が行なわれ、牧草の収穫は夏場から本格化します。

カナダ産チモシー

主産地であるアルバータ州クレモナ地区及びレスブリッジ地区における22年産の作付面積はほぼ前年並みになることが予想されています。一方で肥料価格が高騰しているため、生産者によっては施肥量を抑えることを考えており、単収への影響が懸念されています。加えて産地では22年産も早魃が続くことが予想されており、チモシーだけでなく、自給粗飼料においても低単収となることが危惧されており、生育期の降雨が望まれています。

豪州産オーツハイ

産地輸出業者によると、現在22年産の播種作業を前にオーツハイの仮契約に向け生産者との間で協議が行われていますが、各生産者オーツハイの作付面積を減少させる見込みとなっています。肥料代や燃料代といった生産コストが高騰するなか、生産者はより換金性の高い作物に興味をもっており、ロシアによるウクライナ侵攻により、菜種や小麦の相場高止まりしている中で、オーツハイからの転作を考えている生産者が多い状況です。

豪州の海運情勢

引き続きコンテナ不足や不安定な本船スケジュールのなか、輸出業者は船腹確保に苦慮しており、不安定な入船スケジュールが続いています。加えて海上運賃についても引き続き上昇が続いており、豪州産オーツハイ価格を押し上げています。